

論文審査の結果の要旨

氏名：韓 承 甫

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：成瀬巳喜男論～『流れる』（1956）を通して見る成瀬映画における「人物の対等化」～

審査委員：（主査） 教授 鳥山正晴

（副査） 教授 田島良一 教授 村山匡一郎

韓承甫の博士論文は、映画監督成瀬巳喜男の演出を分析した論文である。

成瀬巳喜男は、黒澤明、溝口健二、小津安二郎と並び称される日本の映画監督として巨匠でありながら、彼らと比べると、その研究は決して多いとは言えない。それは成瀬映画には名作と言われる作品と同時に、数多くの公開当時に批判された映画も存在することに由来するのかもしれない。この論文は、その原因を考察しながら、成瀬映画の特殊性、そして成瀬映画の本質を探ろうとしたものである。

第1章では、成瀬映画 87 作品の中に、名作と言われる映画公開当時から現在まで一貫して評価されている『浮雲』や『めし』などとは違い、公開当時に評価されていない作品も数多くある。その疑問がこの論文の、ひとつのモチーフとなっていることが示され、その理由を解明すべく、論者は先行研究をつぶさに調査し、ひとつの見解に到達する。それは、成瀬映画は「日常の描写に卓越している映画」、「女性中心の映画」、「小市民中心の映画」、「抒情的な映画」としては卓越しているが、そうした特徴が表れていることだけにとどまっていて、登場人物を通して深い悩み、映画のテーマにおける作家固有の切り口が伝わるまでには至らない、というものであった。この「成瀬の表現上の特徴は表れているがテーマや人物の感情表現がはっきりと伝わらない」ということを論者は独自に、成瀬調のジレンマ、とこの論文の中で表現している。

第2章では、この成瀬調のジレンマの理由を解くことが、成瀬映画の本質を解明することに繋がるという見解から、新たな分析方法を採用し、その採用に至るまでの経過と理由が語られる。その新しい分析方法とは、成瀬と多く映画を作った撮影監督・玉井正夫のインタビューの中の、「一步步いて振り返る、次の方がまた一步步いて、また近づいてくる。（中略）成瀬独特の、あの振り返りのポジションがある」という言葉からヒントを得た、成瀬映画の登場人物の〈すれ違い〉〈背を向ける〉〈振り向き〉という動きの演出に着目したことである。これは従来にない新しい着目点であり、論者が文献研究だけに止まらず映画制作にも精通している所以であろう。実際に成瀬映画のコンティニューイティを分析すると〈すれ違い〉〈背を向ける〉〈振り向き〉が多い。そして成瀬映画の中でも 1956 年の『流れる』は登場人物が多く、人物の交差が多いこと。公開当時は、オールスターキャストであることばかりが注目され、内容的には批判的な批評が多く、成瀬調のジレンマが指摘された作品であることから、分析作品の中心に据えている。

第3章での『流れる』の分析で、〈すれ違い〉〈背を向ける〉〈振り向き〉の動きの演出が、どのように扱われ、またどのような効果が表れているかを検証している。成瀬調のジレンマを指摘されている作品のコンティニューイティの分析は、先行研究では非常に少なく、この論文の新たな取り組みと言える。その動きの演出の起点として小道具や、子役の登場人物が使われる場合があること、ある特定の空間で頻繁に行われることなどを発見する。また視線と複合してさまざまな解釈が出来ることを分析している。これまでの成瀬研究では、視線の演出は数多く指摘されていたが、〈すれ違い〉〈背を向ける〉〈振り向き〉の動きを組み合わせることによって、さらに奥深い新しい研究となっている。『流れる』の分析の結果、それらの動きの演出で、人物像が強調され、新たな感情が表出し、登場人物がストーリーとは関係なく個別の人物像として独立したキャラクターになることを発見している。同時にこの効果は、映画の登場人物が、主役、脇役など映画の中の役柄の機能において曖昧になり、それぞれが対等になっていく。論者は、この「対等化」が成瀬調のジレンマの原因であるが、現在ではそれによる人物像が浮き彫りになることによる効果の方を重要視すべきで、そこが成瀬映画の真骨頂で新たに評価されるべき特徴である、としている。成瀬映画の中で一貫して評価されている『浮雲』などは、主役と脇役の区別が明確になっており、登場人物の役割と出来事がすべて主人公に帰結しているとの分析結果を述べている。つまり、これまで時代を超えて一貫して評価されている作品は、成瀬調のジレンマから脱した、映画としての傑作であるが、成瀬の本来の特徴を持った映画ではないと指摘している。

成瀬巳喜男の映画の演出に関して、これまでの先行研究では「視線演出」を中心に独特の演出が指摘されてきたが、ただそうした指摘は、例えば「視線送り」のように、演出の特徴として挙げられるにとどまり、それがいかにシステムチックに適用されて成瀬演出の本質のひとつとなっているか、またそれぞれの作品においていかに働いているかということにはあまり言及されることがなかった。それに対し、この論文では、撮影監督の玉井正夫の証言にヒントを得て、「視線演出」を含めた〈すれ違い〉〈背を向ける〉〈振り向き〉といった登場人物の動作に注目し、公開当時は評価の低かった『流れる』を例として取り上げ、そのコンティニューティに沿って詳細に分析することで、成瀬巳喜男の独特な演出を考察している。映画における登場人物の動作や振る舞いはしばしば見落とされがちであるが、成瀬演出による人物の動作や振る舞いに注目して体系的に分析・考察したことは本論文の新規性といえる。

第4章では、上記の『流れる』から導いた結果を、成瀬映画における普遍的な特徴であることを立証するために、あらゆる時代の成瀬映画を分析している。成瀬映画87本のうち、『君と別れて』などのサイレント時代から、戦前・戦中の成瀬がシナリオを書いた作品、戦後の井手俊郎、田中澄江、水木洋子らのシナリオライターによる作品を網羅している。またシナリオが現存している作品に限定しているが、その理由は、〈すれ違い〉〈背を向ける〉〈振り向き〉の演出によって、シナリオから見ることのできるストーリーとは違ったストーリーや、シナリオにおける登場人物とは違った、人物の新たな側面が垣間見えなければならないからである。その検証の結果、その成瀬の特徴は成瀬自身のシナリオ、シナリオライターの手によるもの両方の映画にも見られ、成瀬の演出の特徴であることを確信し、それによって主役、脇役などの登場人物の機能が曖昧になる「人物の対等化」が生じている、と述べている。

そして結論では、その対等な登場人物の関係は、主役の性格、脇役の将来、脇役と主役の間に新たな意味を生じさせており、これは時代や社会の変化に左右されない、成瀬固有の演出方法である、と今までにはなかった新しい知見を導いている。〈すれ違い〉〈背を向ける〉〈振り向き〉など人物の動作の演出を通して「卓越している日常の描写」や「抒情的な雰囲気」を醸し出す映画の中に描かれた世界に至る上で、「人物の対等化」、すなわち、映画の中に描かれた世界に登場する人物すべてに同じように成瀬演出が施される。それによってストーリー上の主役と脇役の違いを超えて人物が対等化になる。その結果、観客にとって自分たちの日常世界に近い現実感がもたらされると同時に、映画の中の描かれた世界の現実感が増すことになる。そこに、これまで「卓越している日常の描写」や「抒情的な雰囲気」といった先行研究で言及されてきた成瀬演出の魅力が生まれ、成瀬巳喜男独特の演出の本質があるとしている。この点に関しても、これまでの成瀬研究を踏まえた新しい知見といえる。この論文は、演出の視点から考察した成瀬巳喜男論として、論理的な説得力を伴っている。

以上のように、この論文は、「成瀬の表現上の特徴は表れているがテーマや人物の感情表現がはっきりと伝わらない」という論者の言うところの成瀬調のジレンマを解明することから始め、これまでの先行研究がもっぱら人物の感情を表す〈視線〉に集中していたのにたいし、玉井正夫の証言をヒントに新しい方法で分析したこと。そしてその結果として、主役と脇役の区別が曖昧化される「人物の対等化」という先行研究にはなかった新たな成瀬演出の特徴を見出し、それが『流れる』にもっともよく表れていることを綿密なコンティニューティの分析によって論証し、『流れる』こそ「成瀬演出のもっとも重要かつ代表的な作品にふさわしいだろう」という論者の結論など、これまでの成瀬巳喜男研究にはなかった新規性に富んでいる。また成瀬作品の踏査によって論文の趣旨の一貫性、緻密な先行研究の調査、成瀬をめぐる文献や俳優たちの発言の調査を十分に踏まえ、新しい成瀬演出の特徴が論理的に組み立てられおり、成瀬研究として新しい知見を示しており、高く評価できる。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成29年1月30日